すみだ郷土文化資料館だより MIYAKODORI

みやこどり

みやこどり(ゆりかもめ)は、
すみだを舞台にした和歌に登場するなど
墨田区にゆかりのある鳥です。

すみだ郷土文化資料館
SUMIDA HERITAGE MUSEUM

第70号 2025年(令和7年)2月発行

ふるさととの出会い、ときめきへの旅。
すみだ郷土文化資料館
131-0033 東京都墨田区向島二丁目3番5号
☎(03)5619-7034 ㏫(03)3625-3431
電話番号は正確に。
https://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryou/kyoudobunka/index.html
E-mail sumida-htm@city.sumida.lg.jp

■開館時間
午前9:00～午後5:00(入館は午後4:30まで)
■休館日
毎週月曜日(祝日に当たるときは翌平日)
毎月第4火曜日(祝日に当たるときは翌平日)
12月29日～1月2日
■観覧料
個人100円、団体(20人以上)1人80円、
中学生以下、身体障害者手帳・愛の手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方及び介助の方は無料

両国駅前での町会解散写真　撮影日：1945年3月10日　撮影：工藤哲朗　寄贈：加藤順康

企画展 東京大空襲80年―新たな記録を探し続けて―

会期：令和7年2月15日(土)～5月25日(日)

まもなく1945(昭和20)年3月10日の東京大空襲から80年となります。墨田区域はその後、4月、5月にも空襲被害を受け、人々の生命や家屋、財産に大きな被害が出ました。

しかし、その実態の解明は進まず、当館も開館以来25年、多くの体験者やご遺族のご協力をいただきながら、東京空襲や戦争を企画の1つの柱として調査・研究と展示を続けてきました。いち早く実施した空襲体験画の収集、空襲死者名簿の研究、戦災孤児の展示、近年では公文書から見る空襲記録など、体験者の証言や体験記を土台に、様々な切り口で迫ろうとしてきました。

今回も、新たな記録や資料を各所に求め、調査・研究した成果をご紹介します。今後は、世界や未来を見据えながら、教科書にも載る歴史的な出来事を、事実の重さと共にどのように伝えていくかがますます問われていくことになります。本展示がその一助となれば幸いです。

当時の工藤写真館の焼け跡、左は旧国技館の相撲茶屋　撮影：工藤哲朗

両国駅近くの京葉道路、左奥が両国橋。右奥に総武線の隅田川橋梁が写っている　撮影：工藤哲朗

■空襲研究の展開

空襲の実態解明は、1970（昭和45）年の「東京空襲を記録する会」（以下、「記録する会」）の発足から始まる、各地での空襲記録運動の広がりの中で本格的に始まりました。それまでにも、東京都（以下、都）は1953（昭和28）年に公式の記録である『東京都戦災誌』を刊行するなどしていましたが、B－29の機数が不正確であるなど、課題がありました。

「記録する会」は、アメリカでの関係資料の収集の一方、体験記の募集を行い、都の助成を得て『東京大空襲・戦災誌』全5巻を1973～74（昭和48～49）年に刊行し、その1巻が3月10日の、2巻が他の日の空襲体験記を掲載し、3巻には日米の記録を掲載しました。

「記録する会」を立ち上げた評論家の松浦総三、作家の早乙女勝元らは、これで研究が進むことを期待しましたが、多くの歴史研究者は各地の空襲研究に参加せず、空襲体験者や在野の研究者が実態解明の主力になりました。一方、岩波新書の『昭和史』の執筆者だった今井清一は横浜の、公害史研究でも知られた小山仁示は大阪の空襲研究をリードし、他の地域の研究者への協力も惜しみませんでした。

■空襲研究の課題

しかし、東京の空襲研究では、多摩地域や八王子が継続的に取り組んだのに対し、「記録する会」は戦災記念館を求める運動にシフトしたこともあって、実態解明は限定的な形になりました。それでも、新たな資料の発見や事実の継承の呼びかけなどで果たした役割は大きいものがあります。

今日の空襲研究の課題としては、都の公式記録である『東京都戦災誌』の根拠となった資料で確認できないものがあるほか、今から約50年前に編纂された『東京大空襲・戦災誌』第3巻に掲載の被害記録の根拠資料の一部が現在確認できないことがあります。

また、空襲犠牲者の名簿が非公開となっており、1999（平成11）年から都が作成している空襲犠牲者名簿も関係部分が血縁者に公開されるだけで、全体像は分かりません。

以前当館も取り組んだ、空襲被災地図も正確なものはまだなく、日ごとの被害を正確に記載したものはまだありません。つまり、基本状況の確認や基礎資料の検証が最初の、そして最も大きな課題です。

また、他にも軍による救護の実態の解明、体験者の避難経路、空襲死者の住所と死亡場所の関係、関連の戦争遺跡の把握などの課題は、これまで当館が解明に取り組んできたところです。

■空襲80年に向けての取り組み

今年度当館では、空襲80年に向けて、以前にも実施した空襲体験者の証言映像の製作を行うほか、空襲を伝え

る活動をしてきた人の証言映像も製作することにしました。

加えて、今回の展示、そして続けて6月から実施予定の次回の空襲企画展でも、これまでの課題の研究を深め、新たな課題への取り組みを紹介します。

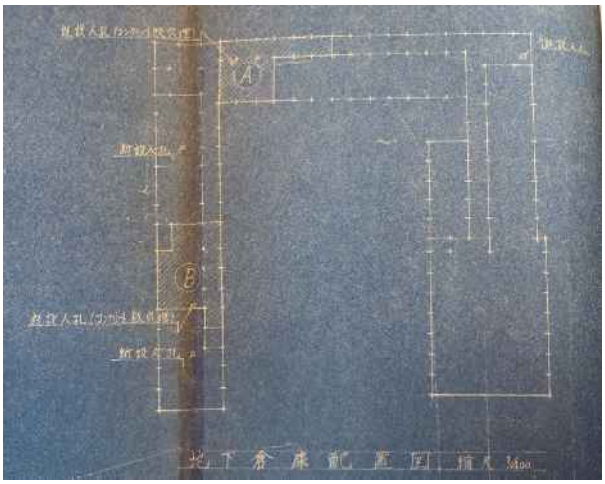
それでは、今回の展示の中から、区内の新たな空襲被害写真の調査、関東大震災後に建てられた復興小学校に設けられた地下室、新たな空襲遺骨名簿についてご紹介します。

■新たな空襲被害写真の調査

両国にある工藤写真館は、戦前より大相撲の力士の写真を多く撮影してきたことで知られています。その写真は、墨田区の小さな博物館にも登録されている、併設の相撲写真資料館で定期的に公開されています。

初代の工藤哲朗は、社会的事件があると折々撮影に出かけており、両国橋両岸地域の空襲被害状況も撮影していました。この空襲被害写真は、工藤哲朗の生涯を描いた作品で掲載されており、また地域では一部の印刷物に掲載されてきました。

今回、工藤写真館のみなさまのご協力を得て、空襲被害写真と思われるものの調査を行いました。10枚（パノラマで組み合わせているものを別々に数えると16枚）の写真を確認できました。また、写真館にはありませんが、1面に掲載した写真も工藤哲朗撮影で、合わせて11枚（別々に数えると17枚）の写真がこれまで確認されています。写真のネガは現在確認できず、撮影時期は、町会の解散写真は3月10日、その他の写真も遅くとも3月中の撮影ではないかと考えています。



扇橋国民学校の「地下倉庫」配置図　所蔵：東京都公文書館

これまでの東京の被災写真は、マスコミが軍の許可のもと撮影したもの、警視庁カメラマンの撮影したものが圧倒的に多く、他の都市に多い写真館の主が撮影した事例は珍しいと言えます。貴重な発見であり、今後も調査を続けていきたいと考えています。

■国民学校（小学校）の地下室は防空壕だったか

関東大震災の復興過程で、次に備える災害の中に、震災や都市火災と同時に、空襲も次の来るべき戦争で当然のものとして想定されていました。日中戦争後、日本も様々な対策を実行していきますが、軍隊の側の対応は、国力の差や戦争の推移もあり、次第に国内を守る戦闘機も前線に出されるなどして、十分ではありませんでした。それを埋めるように、民防空と呼ばれた、軍以外の防空対応で、銃後と呼ばれた、戦場ではない場所にいる国民の努力や行動が求められました。

その中で、行政は盛んに防空壕を掘ることなどを求めますが、いくつかは自らが主体となって、公共防空壕と呼ばれた、模範的な防空壕が何か所か都内に作られたのは知られていました。

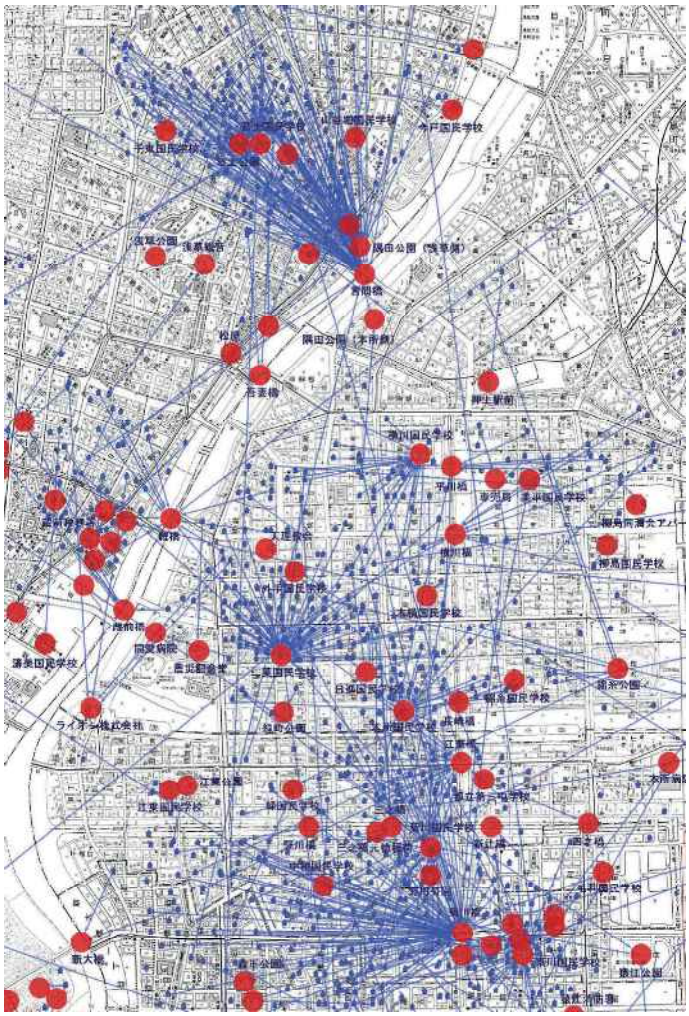
これまで、空襲体験者の証言で、空襲時に最寄りの学校に避難することになっていたとするものがありました。その中にはさらに、学校の地下室に逃げ込んだというものや、空襲後の地下室の惨状が書かれているものもありました。避難所だったという国民学校は、関東大震災後に建てられた復興小学校と符合しそうだとは感じていましたが、詳細は分からないままでした。

壊滅する扇橋国民学校―出入口に殺到する人々
作者：石田恭子　年齢：当時５歳

当館所蔵の空襲体験画の中に、石田恭子さんの「壊滅する扇橋国民学校」があります。現在の江東区石島にあった扇橋国民学校の防空壕に逃げ、2つあった壕の1つに入りました。いつも入っていたもう1つの壕は、何百人もの人が亡くなったと後で知ります。石田さんが母、兄、弟と入った壕も熱でひび割れ、ドアを開けて多くの人は出ていきましたが、石田さんの母は「死ぬならここで皆いっしょに」と壕に残ることを選び、生き延びた一方、出て行った多くの方は亡くなったといいます。

今回、東京都公文書館での資料調査の結果、空襲前に避難所とされた国民学校に地下室があったという証言を裏付ける、地下室を建設した時の公文書が見つかり、当初から「市民防護」のために作られたことが分かりました。日中戦争期から工事が始まり、当初から市民向けとして一定の設備を備えた施設が作られていることが分かり、それが一定の役割を果たしたことは確認できます。一方で、その数や収容力では、地域住民のごく一部しか収容できず、設備の不十分さもあり、避難した人が犠牲になった可能性も明らかになりました。

証言から、資料の残っていない学校



「東京大空襲　いのちの被災地図」の一部

にもあったと思われますが、詳細は今後の調査によります。学校毎の数の違い、広さなどが分かり、証言を検証し、よりリアルに理解できるようになることが期待できます。

■新たに見つかった空襲犠牲者の遺骨名簿

これまで当館では、『都内戦災殉難者霊名簿』（以下『霊名簿』）の共同研究を進め、「東京大空襲　いのちの被災地図」を製作するなどの成果を挙げてきました。これは、『霊名簿』の空襲時の住所と遭難場所を線で結び、地図上に明示したものです。これにより、どの地域の人がどこへ逃げて亡くなったかの傾向を知ることができました。現在のところ、空襲時の火災の延焼状況の実態を記録したデータが乏しく、多くの方が亡くなっている犠牲集中点がどうして形成されたかなどは研究を続けています。

今回、東京大空襲・戦災資料センターが所蔵する、『東京大空襲・戦災誌』の編集者の資料から、新たな空襲犠牲者の遺骨名簿が見つかりました。

この遺骨名簿は、以前当館学芸員とNHK記者が発見した『戦災者個別　遺骨霊名簿』（以下、『遺骨霊名簿』）の後継名簿です。1972（昭和47）年に整理された結果作成されたようですが、記載を比較すると、それだけではないことが見えてきました。

現段階で、双方の記載が一致するものは6割近くある一方、誤字や表記が変わっているものが2割、2文字以上表記が異なり、同一の可能性を推定するものが1割、新たに加わっているものが1割あります。これまでは、単純に遺骨の返却が進んだために、残っているものが分かりやすくなるように整理したと考えていましたが、増えているというのはどういうことなのか。改葬が間に合わなかったか、慰霊堂内での整備が遅れたのか、今のところ詳細は不明です。今後も照合作業を続けながら、空襲犠牲者遺骨の扱いがどう変わっていったのかを確認していきたいと思います。

広島や長崎では、未返還で個人名の分かる遺骨は、近年はその氏名や誤字の可能性も記したポスターを全国に配布するなどして、返還の努力をしています。東京ではそもそも、返還していることが知られておらず、都もほとんど広報はしていません。

また、慰霊堂に納められている死者名簿や、『霊名簿』『遺骨霊名簿』も公開されていません。都による名簿の非公開は個人情報であるためとされますが、時間の経過を鑑みて、同じく非公開の100年以上前の関東大震災の死者名や東京空襲の死者についても、遺族の反対がないものは公開するような対応を検討する時期ではないかと思います。

『霊名簿』の照会は東京大空襲・戦災資料センターが行っており、遺族などには回答しています。

当館には、体験者や遺族からの問い合わせが今も絶えません。この数年の研究の進捗を、今回そして次回の企画展でご紹介します。世界の戦争が報道される中、展示を見学いただき、空襲被害について少しでも身近に、重みをもって感じていただき、平和について思う機会となれば幸いです。

（学芸員　石橋　星志）

■ 関 連 イ ベ ン ト ■

証言映像上映会と講演会

スミダSGEP『東京大空襲とすみだ』

日　時：令和7年3月1日（土）13：00～

内　容：戦後70年に区民によって作成された作品の上映会と、製作者の話を聞く会

講　演：多田井利房、深谷陽子（スミダSGEP）

空襲体験画ギャラリートークと平和祈念コンサート

日　時：令和7年3月9日（日）13：00～

内　容：新日本フィルの有志による平和祈念コンサートと空襲体験者の証言を聞く会

※内容の詳細はホームページをご覧ください